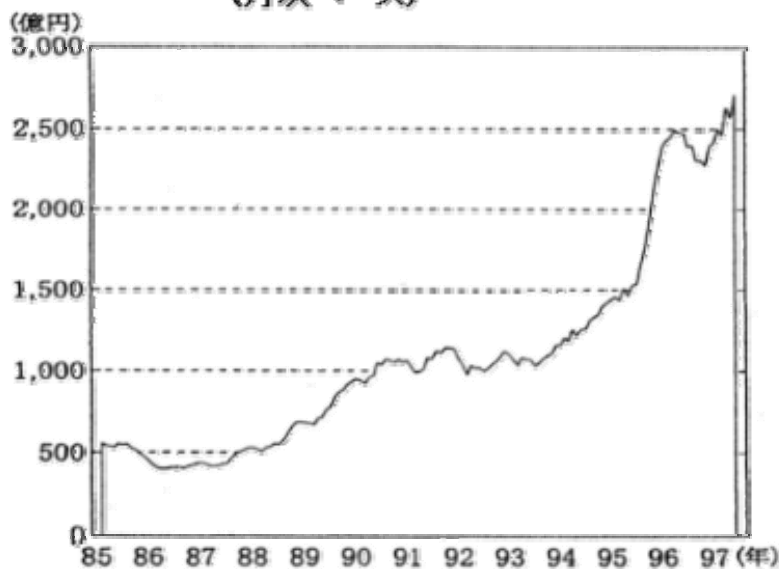


海外依存度が高まる電子部品・デバイス

1. 電子部品・デバイスの輸入が急増

電子部品（抵抗器、コンデンサなど）とデバイス（IC、LSI など）の輸入が急増している。96年の輸入額は、電子部品とデバイスを合わせて2兆8,791億円（前年比31%増）となり、過去最高を記録した。足下の状況をみても月次輸入額はハイペースで推移している。

図表-1 電子部品・デバイスの輸入金額推移
(月次ベース)



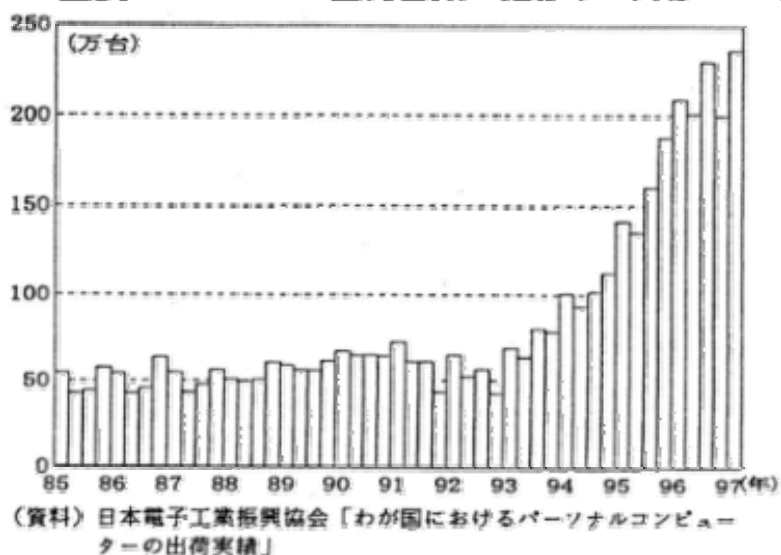
(資料) 大蔵省「日本貿易月表」より作成

このように部品・デバイスの輸入が増えているのは、輸入額全体の4割を占める集積回路（IC、LSI）の輸入が93年以降急増しているためである。96年の集積回路の輸入額は1兆2,744億円でこれも過去最高である。87年の輸入額が1,627億円程度であったことと比較すると、わずか10年で約8倍まで拡大したことになる。

集積回路の輸入が増えたのは、電子機器の低価格化が進行するなかで、安価な海外部品への需要が高まったためだが、その背景には日系企業による海外生産がある。日本の部品メーカーが本格的に海外生産を開始し、供給力を増したことが輸入拡大の原動力となっている。デバイスの海外生産移転は90年代に入ってからも続いており、94年からは中国でも合弁によるIC生産が開始されている。

また、国内のパソコンブームも輸入増加の要因のひとつである。パソコンの国内出荷台数は94年から急増して、96年には840万台を記録したが、パソコンの心臓部で使われるMPU（マイクロプロセッサ）は大部分が米国から輸入され、しかも単価が高いために輸入金額を大きく押し上げている。

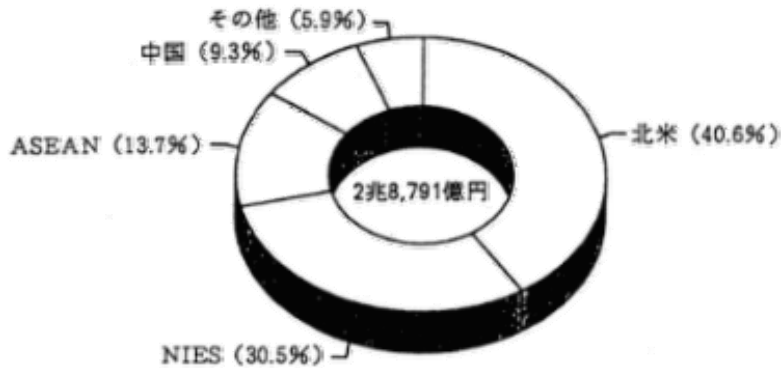
図表-2 パソコン出荷台数の推移(四半期ベース)



2. 輸入先は北米とアジアが中心

電子部品・デバイスの輸入先をみると約4割が北米、約5割がアジアとなっている。北米からの輸入は集積回路が中心であるが、アジアからは低価格の集積回路のほか、抵抗器やコンデンサなど一般電子部品の輸入が多い。

図表-3 電子部品・デバイスの輸入先(96年)



(資料) 大蔵省「日本貿易月表」より作成

アジアからの輸入を地域別にみると、約6割は NIES (台湾、韓国、シンガポール、香港) となっており、メモリ IC など比較的 low price のデバイスが中心である。また、メーカーも日系より現地企業割合が高くなっている。

一方、ASEAN (タイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア) からの輸入は、デバイスよりも抵抗器、コンデンサなどの受動部品や組立部品、パソコン記憶装置向けの磁気ヘッドなどが大きな比重を占めている。

また、最近増加しているのが中国からの輸入である。中国からは変成器 (コイル、トランス) やモータなど労働集約部品の比率が高いが、最近ではコンデンサなど素材系電子部品やデバイスの輸入も増えており、輸入品のレベルは年々高度化している。

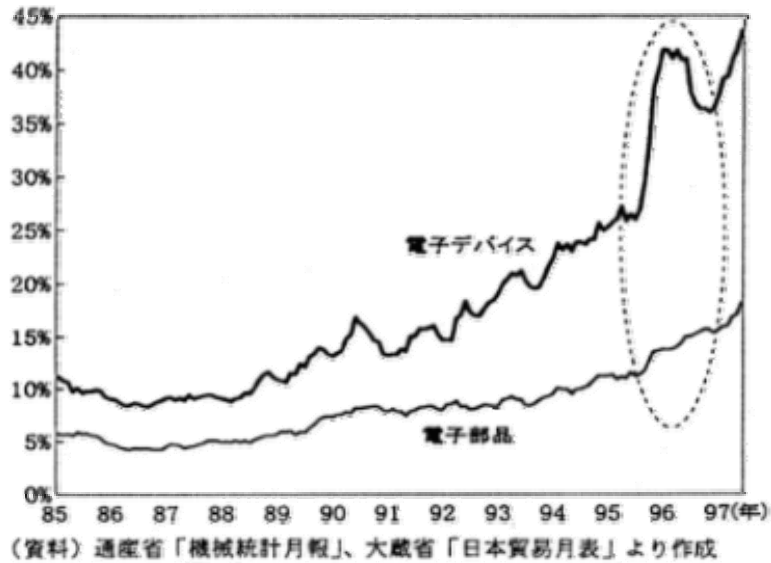
なお、ASEAN と中国からの輸入部品は、ほとんどが現地の日系メーカー製である。

3. 電子部品・デバイスも空洞化の兆し

部品・デバイスの輸入額が増加する一方、国内生産は横ばいから微増程度で推移したため、海外依存度 (輸入 ÷ (生産 + 輸入 - 輸出)) が急上昇している。

種類別に海外依存度の推移をみると、電子部品 (抵抗器、コンデンサなど) よりも電子デバイス (IC、LSI など) のほうが高くなっている。ただし、電子部品の上昇トレンドは為替変動と関係なく推移しており、部品産業の海外移転に合わせて構造的に輸入が増加している様子が表われている。

図表-4 電子部品・デバイスの海外依存度の推移



現在、国内の電子部品および電子デバイスの需要は、移動体通信機器とパソコン関連が牽引しているが、携帯電話もパソコンも低価格化が進んでいることから、安価な海外部品に対する需要は今後も拡大基調をたどり、海外依存度も上昇を続けるとみられる。

海外依存度は国産品の国際競争力を示す指標でもある。海外依存度の上昇は、これまで国際競争力が高かった電子部品産業でも空洞化の兆しがあることを示している。部品メーカー各社は国内生産体制の維持に努めているが、低コスト部品に対するセットメーカーの要望は根強く、海外依存度は高くならざるを得ない環境にある。わが国の部品需要も本格的な海外依存の時代に入ったといえよう。